

## 二期の抱負とその展開



清水エミ子

「これはね、ぼくらのクミのだからねー」

「おい、よっちゃんのクミ、ここにあつまれよー」

「よっちゃんのクミとぼくらのクミと、いっしょにやらないか。大きいクミつくろうぜ」

「あたし、あそこにいる子たちのクミに入ったことないから、いれてもらおうかな」

「よしこちゃんいっしょにいれてっていおうか」

夏休みが終わって幼稚園にやってくる子どもたちは、一学期とはちがういろいろの問題を、私たち保育者に投げかけてくれる。

・男・女でのあそびの交流が、だんだん少なくなっていくグループが目立ってくる。

・グループの構成員が、固定化してきて、他の子どもたちが入り込みにくくなるグループができてくる。

・能力差によるグループが、できかかってくる。

九月初の子どもたちをみると、一学期の保育の結果が、ひとりひとりの子どもの電子計算機にかけられて、はっきり、ひとりひとりの子どもに、現われてきていると思われる。電子計算機の答えを、しっかり私たち保育者は把握し、一番、充実する二期に、ひとりひとりに適した保育をしなくてはと、こわさとあせりとのいりまじった一種の期待に胸がはずむ。

### 二期はじめのあそび

夏休みに家庭でひとりあそびまたは、兄弟姉妹、近所のかぎられた友だちとのせまい交友関係がしばらくつづいたので、みんなとあそぶののしいねということを一日も早く知らせ、集団での話がスムーズに展開していくように方向づけをするための、活動を用意しよう。

夏休みの経験の再現にばかり気を向けて、友だちといっしょにあそぶことの楽しさを忘れてしまわないようにしたい。夏の経験を再現しながら、たのしいゲームあそびや、ごっこあそびに展開するように心がけたい。

### 夏の採集物をつかつてのゲームあそび

#### ・セミの鬼ごっこ

鬼になった子は、数をかぞえるかわりに、ミーン、ミンとか、ジージージーなど、せみの鳴きごえをして、つかまえに行く。

鬼につかまえられた子も、つかまった時にせみの鳴きごえで鳴く。

#### ・水泳きようそう

ホールのある園はホールで、いろいろな泳ぎ方をしてリレーきようそうをする。

いきは船にのって行って、かえりは船からとびこんで、泳いで来たりしてもたのしいものである。

#### ・トウモロコシはおいしいね

画用紙をまるめて作ったトウモロコシのしんに、折り紙で作ったトウモロコシのつぶをはりつけていくゲーム。全部、べったりはらず、まんなかだけちよこつとはりつけておき、次に、ムシャムシャといながら、きまった数だけ、はがしていく。(たべたことにする) はやくはりつけ、はやくはがれたほうが勝ち。

こんなゲームあそびをして、集団の楽しさを思い出させ、むりな夏の再現はさけるようにしたいものである。

9月から、10月はじめごろまでは、この他に運動会の準備がはじまる。

こんなゲームあそびを、子どもたちと話し合いながら団体競技につかったりしてみよう。

リズムあそびなども、むりをせず、自然の動きを、まとめるくふうがほしい。

#### ・たのしい海辺　リズムあそび

運動会場、全部を海にみだてる。年少児がなみになり、水色のボウシでもかぶって、なみのリズムで行進して来て、なみをつくる。

その間を、いろいろのさかなが(年長児) いったり来たり泳ぐ。かながでて来たりたがでて来たり、グループで船をつくってこぎ出したり、元気な子どもが、泳ぎ出して来たりする。全員で、海辺が形つくられたら、全体で海の曲にあわせて表現あそびをして楽しむ。

新しいものを、毎日毎日、練習練習といつてむりをする、せっかくなか友だちと、ああもしようこうもしようと考えていたことができずに、幼稚園の楽しさが苦しさ変わってしまう。

砂場あそび、水あそび、おすべり、ブランコ、積木、ママゴトと自由な活動、のびのびと友だちとたしかめあえるそぼくな活動

を二学期のはじめは、たくさんさせたい。

この活動を十分に経験させておかないと、後からころみようとするグループでの活動や、ごっこあそびが、発展的に展開していかなくなってしまう。

## 二学期中頃のあそび

### ・楽しいごっこあそびを

グループで話し合いながら、立案から実行までの手順を、楽しみながらわからせよう。役割をきめ、分担の仕方を平等にするにはどうしたらよいか、など、問題解決をしながら活動が展開していくようにし、結果をあせらず、ひとつひとつついでにねいに時間をかけて楽しませたい。

保育者が、活動を引っばっていくのではなく学級集団全体が、みんな自分の活動として展開していくよう、指導助言をていねいにしたい。

怪獣<sup>カイリュウ</sup>ごっこから楽しい絵話しや紙芝居に発展させていく。ガーガー、ウォーウォーと電波を出したり、トランシーバーや無電機でのあそびに夢中である。

このもりあがりをとらえ、そのあそびにテーマを持たせるための助言、誘導をする。

「この怪獣<sup>カイリュウ</sup>はなにをしようとしているの」「それをするために、なにがあるかな」「いりようなものをつくってやれば」などの助

言によって、創造的な身近な材料の利用をくふうさせ、子どもたちにかかせっぱなしにせず、製作も、劇あそびも、楽しく総合された活動になって展開していく。

女兒の役割も適当にみつけてなげかけ、男女がいっしょになって活動できるようにする。活動が一区切りついた所で、経験したものを絵話しや、紙芝居に再現してみることをさせる。

役割をきめ、話し合い、いろいろな材料（折紙、包装紙、セロファン、広告の紙など）を利用してつくってみる。できあがったものは、たんじょう会、または楽しい会の際に発表しあうようにする。みんなで作ったんだね、みんなで考えてできたんだね、ということ、保育者はひとりひとりに知らせ、自信がもてるように指導したい。

自然発生的におこったあそびを、全体の活動にもりあげていく。この時一番大切なことは、全体のものとしていつ、どのような状態でなげかけたらよいかを保育者は、見あやまらないようにしなくてはならない。

そのためには学級全体のもりあがりと、ひとりひとりの興味の状態を把握していなければならぬ。

今朝、○○さんたち、品物はこびをしていただけ、あの時、○○さんとぶつかりそうになったわね、あぶなかったじゃない」「あぶなくないようにするのにどうしようかしら」と子どもたちに問題をなげかける。

「せんろかいておけば」「交通のきまりしらせれば」「それならばよく交通整理してあげようか」と声ができる。

こんな発言に保育者は、のりものごっこの活動を、ボンとのせて子どもたちにわたしてあげる。

「それじゃ、あしたは〇〇くん交通整理おねがいね」

「〇〇さんたち線路工事の人たちになってみない」と、何の気なしに活動の役割をわたしてみる。

これで、みんなの興味がのって来たら、園庭全体をつかってのりものごっこに発展させていく。

子どもたちが、活動してみても、ほしくなかったり、必要を感じたものを製作したり、つかったりさせるようにしたい。

保育者が、先まわりして、これで、こういうものをつくりましようというのではなく、子どもたちが、「先生、こういうのつくりたいけれど」といって来た時、これで作ってみたら、と助言誘導するようにしよう。

子どもたちにまかせっぱなしにするのではなく、保育者のねらいを子どもたちの興味と要求にじょうずにのせて、自分たちの活動として展開させるような指導が大切なのである。おもちゃやごっこ、くだものやごっこも同じ。

こんな大きな活動の間には、かんたんで楽しい小さな活動を、なげかけてあげることが忘れないようにしたいものである。

・日なたで、しずかにお話をきく

保育者の身のまわりのもの、子どもたちが身につけているものを利用して、お話を楽しむ。

「かきの木ぼうやは、こんなに小さな小さな子でした」とハンカチをまるめてかきをつくってはなす。みんなのかきはどのくらい、と子どもたちにもハンカチでかきをつくらせてみたりして楽しい話づくりを子どもたちといっしょにする。

日だまりで楽しくセッセセなど、リズムミカルに。セッセセ、ことしのぼたん、わらべうた、まりつきあそびなどを楽しもう。そぼくな、家にかえてもお母さん、兄妹といっしょにあそべるあそびを多く取り入れたいものである。

体力をのばし、がんばる力をつけるための体育的なあそびを取り入れよう。

なわとび、まりつき、のぼり棒、とびばこなど、自分の程度に応じて努力し、れんしゅうし、マスターしていく楽しさを味わわせながら活動させよう。なわとびなどは、練習すればできるようになるのだということを、根気強い子の例を子どもたちにも示して、まげずに努力するようにさせる。

体育の日などを中心に、体育カードのようなものをそれぞれ子どもの手でつくらせ、なわとびがとべるようになったら、なわとびカードに合格のスタンプ（いもばん、ねんどばんでつくったもの）をおしていく、そして保育者に合格した日を書き込んでもらうようにさせる。

・友だち同士教えあい、はやくグループ全員が合格できるよう、グループごとのはげましあいの場に活用する。

「ナワが前に来た時、ジョンととんでごらん。はやくとぶからだめなのよ。はじめはかけだしながられんしゅうするとはやくできるよ」

「手をうんと大きくうごかすんだよ、そうするとつかからないよ」と、指導のしかたも子どもたちに学ばせたい。

友だちのあらをさがすのでなく、はげましあう友情を育てよう。

とびばこなど、二段合格、三段合格と級をつくり、カードや、スタンプの色をかえておくとねばりづよく努力する。

五歳児年長児の二期期には、このように努力したら、こんなよい結果が生まれるのだという自信とよろこびを、しっかりつかませたいものである。そのためにも、なわとび、とびばこ、鉄棒、まりつき、などはよい活動である。

こんな活動のあとに、まとまったルールのある活動をなげかけると、おどろくほど楽しんで全員で参加してくる。

・ソフトボール大会をしよう

時間をかけて、野球のルールを全員に知らせる。女兒など、男児よりよるこんで興味を示して来る。

ボールを手で打ったり、ビニールのバットで打ったりしてくりかえしながら、ソフトボールのルールを全員にわからせ、グルー

プ対抗ゲームをする。

グループでどうしたら力を合わせられるか、本当の協力のしかたはどんな助け合い方がよいのか、問題のおこった時に、ひとつひとついいいにあつかって、二期期終りのしめくりりにソフトボール大会をして楽しむのもよいでしょう。

こんな遊びから生まれたよろこびや問題をテーマに話づくりをし、劇あそびに発展していくように仕向けよう。

・ソフトボールのたまのとりっこ

○○さんが、なまけたから、まけちゃったなどというテーマを楽しい話づくりに進めていこう。

二期期の年長児は、一年保育も二年保育も、手かげんはいらない。それぞれの学級の状態に適したように活動を展開し発展していくようにすることが大切である。

計画（立案）から展開までを、保育者が表に出て引っぱるのでなく、かげで指導、誘導して、子どもたち自身での活動にさせることが大切である。

子どもたちの好みに流されてしまうことをふせぎながら、領域の総合を考えて子どもたちに活動のきっかけをなげかけるようにする。ひとつひとつ、こころやったから、こころなつたのだという関係を、把握しながら、よろこびと、自信をつかませるようにしたいものである。

（大田区立蒲田幼稚園）